2019年1月23日

博士学位審査　論文審査報告書（課程内）

大学名　早稲田大学
研究科名　大学院人間科学研究科
申請者氏名　石川　奈保子
学位の種類　博士（人間科学）
論文題目（和文）　オンライン大学の学生の自己調整学習とその支援方法

論文題目（英文）　Self-Regulated Learning and Its Support for Students of Online University

公開審査会
実施年月日・時間　2018年11月21日・9:00-10:00
実施場所　早稲田大学　所沢キャンパス　100号館　307教室

論文審査委員

	所属・職位	氏名	学位（分野）	学位取得大学	専門分野
主査	早稲田大学・教授	向後　千春	博士（教育学）	東京学芸大学	教育工学
副査	早稲田大学・准教授	森田　裕介	博士（学術）	東京工業大学	教育工学
副査	早稲田大学・准教授	尾澤　重知	博士（知識科学）	北陸先端科学技術大学院大学	教育工学

論文審査委員会は、石川奈保子氏による博士学位論文「オンライン大学の学生の自己調整学習とその支援方法」について公開審査会を開催し、以下の結論を得たので報告する。

公開審査会では、まず申請者から博士学位論文について30分間の発表があった。

1　公開審査会における質疑応答の概要
申請者の発表に引き続き、以下の質疑応答があった。

1.1　質問：研究４において、学習目標到達度とメタ認知的スキルの関係は分析しているのか。
回答：本研究では、学習目標到達度とメタ認知的スキルとの関連は分析していない。倫理審査を受けるにあたり、受講生の科目成績は個人情報にあたるため扱わなかった。この点について加筆する。

1.2　質問：研究４のメタ課題の「メタ認知度」得点化の例で、「観点３：コントロール」として分類した「身につけたい」は意志であって、「実際に身につけた」「身につけ

るために何かした」とは書いていない。意志があることと目標設定は同じなのか。

回答：授業の必須課題とメタ課題の〆切が同時であったため、受講生が「こうしたい」と記述していてもその後実際に行動したかどうかまでは明らかではない。この点について加筆・修正する。

1.3　コメント：学習方略使用状況に変化がなかった理由として、考察に「産出欠如」の問題を挙げている。根拠がないのであれば考察に書くことはできない。

1.4　コメント：研究５で、メタ認知度上位５人のプロフィールが不足している。

1.5　質問：受講生がメタ認知についての知識を持っていたのかどうかの確認を、研究の前にしたのか。

回答：受講生にメタ認知の知識があったかどうかの確認はしていない。また、初回授業で「メタ認知」についての説明はしなかった。この点について加筆する。

1.6　コメント：「メタ課題」では振り返らせてやっていくというプロセスを取っているが、やろうと思わせることが支援なのか、行動までさせるのが支援なのか。

1.7　コメント：メタ課題についての先行研究が不足している。海外ではいくつも研究されているはずなので、類似のものがないか、どのような結果が出ているか調べると良い。

1.8　コメント：メタ課題をすることでメタ認知的気づきスキルが上がるのは当然である。実践研究ではこのような側面が少なからずある。よって、プロセスを明らかにしたり分析の根拠を示したりする必要がある。

1.9　コメント：研究の目的に「大学はどのように支援すればいいか」とあるが、大学のカリキュラムの問題ではないので範囲を狭めていい。

1.10　コメント：本研究は、Schunk（2008）の六つのレコメンデーションのうちのどこを研究しているのか。本研究の新規性はどこなのか。2008年に指摘されてから先行研究でどこまで明らかにされているのかを記述すると良い。オンライン大学での実践的な研究はあまり多くはないので、本研究の新規性がどこなのかを明確に掴んで構成すれば、オリジナリティを述べられる。

1.11　質問：本研究のフィールドであるeスクールは、「オンライン大学」なのか「オンラインのコース」なのか。大学の中の一コースがオンラインで提供されているという位置付けのほうが適切なのではないか。

回答：本研究では９割程度以上オンラインで単位が取れる大学通信教育課程を「オンライン大学」と定義している。学部の中のコースも「オンライン大学」に含める旨を明記する。

1.12　コメント：タイトル「オンライン大学の学生の自己調整学習の支援方法」について、大学には学生がいるのは当然なので「オンライン大学における自己調整学習」で十分ではないか。また、英文タイトルの“Benefit”は「支援方法」の訳としては違和感がある。

2　公開審査会で出された修正要求の概要

2.1　博士学位論文に対して、以下の修正要求が出された。

2.1.1　自己調整学習、メタ課題の先行研究を加筆し、本研究のオリジナリティがどこ

にあるかを明確に示すと良い。

2.1.2　タイトルにもある「オンライン大学」について、大学の一コースである場合も「オンライン大学」と呼称することを序論に加筆する。

2.1.3　英文タイトルの“Benefit”を再検討すると良い。

2.1.4　研究４において、学習目標到達度とメタ認知的スキルとの関連は分析していない旨を記載すると良い。

2.1.5　受講生のメタ認知の知識の有無について、説明したほうが良い。

2.1.6　「メタ認知度」得点化基準の「観点３：コントロール」について、意志表示のみであってもコントロールと判断したことについて、説明を加えると良い。

2.1.7　方略使用状況が変化しなかった理由について「産出欠如」を挙げているが、根拠がないのであれば修正したほうが良い。

2.1.8　メタ課題を実施したことでメタ認知的スキルが向上するプロセス、根拠について記載したほうが良い。

2.1.9　研究５において、「メタ認知度」上位５人の属性を示したほうが良い。

2.2　修正要求の各項目について、本論文最終版では以下の通りの修正が施され、修正要求を満たしていると判断された。

2.2.1　自己調整学習、メタ課題についての先行研究を、第１章第２節「自己調整学習」に加筆した。また、本研究の新規性とオリジナリティについて、第１章第３節第１項「研究の目的」に加筆した。

2.2.2　「オンライン大学」の定義について、第１章第２節第１項「オンライン大学とその学生の特徴」に加筆した。

2.2.3　英文タイトルを、“Self-Regulated Learning and Its Support for Students of Online University”に修正した。

2.2.4　本研究では科目の成績は扱わなかった旨を、第３章第１節第３項「方法」に加筆した。

2.2.5　受講生のメタ認知の知識の有無について、第３章第１節第３項「方法」に加筆した。

2.2.6　「メタ認知度」得点化基準の説明を、第３章第１節第４項「結果」に加筆した。

2.2.7　方略使用状況が変化しなかった理由について、第３章第１節第５項「考察」を修正した。

2.2.8　メタ課題とメタ認知的スキルの関連性について、第１章第２節第４項「自己調整学習の支援方法」、第３章「オンライン大学の学生に対する自己調整学習の支援」に加筆した。

2.2.9　「メタ認知度」上位５人の属性を、第３章第２節第３項「結果」に加筆した。

3　本論文の評価

3.1　本論文の研究目的の明確性・妥当性：本研究は、オンライン大学（e ラーニング制大学通信教育課程）の学生の自己調整学習の状況を明らかにし、学生の自己調整学習スキル向上のための支援方法に関する知見を獲得することを目的としている。具体的に

は、(1)全般的な自己調整学習方略の使用状況、および、援助要請を含む、学習のつまずきへの対処状況を明らかにする、(2)学習方法について振り返る「メタ課題」の自己調整学習スキル向上への効果と改善点を検討する、の２点を目的として設定している。オンライン大学における学生のドロップアウト問題への対処のために、学生の自己調整学習スキル向上とそのための支援方法に関する知見を獲得することは重要な課題となっており、本研究の目的はそれに合致する妥当なものと判断できる。

3.2　本論文の方法論（研究計画・分析方法等）の明確性・妥当性：本研究では、自己調整学習方略の使用状況、および、学習のつまずきへの対処状況、メタ課題についてのデータ収集方法は明確に示されている。これらのデータ収集の方法は、先行研究の手続きと知見に従っている。また、データ分析については、先行研究で妥当とされる統計分析手法、質的分析手法で解析されている。これらのことから、本研究の方法論は妥当なものであると判断できる。

なお、本研究は、対象大学の学習管理システムを利用して、フィールドとなった科目の学習の過程で得られたデータとアンケートデータを利用して実施された。本論文で実施した調査の手続きは、研究１～３の質問紙調査においては、日常的な内容を超えての質問項目はなく、回答は任意であった。回答データは学習管理システム上で匿名化された。また、研究４・研究５は、早稲田大学「人を対象とする研究に関する倫理委員会」の承認を取得し（2017-292）、調査前には参加者に対して調査内容についての十分な説明を行って実施しており、倫理的な配慮が十分になされていると評価した。

3.3　本論文の成果の明確性・妥当性：本研究は、社会人が多くを占めるオンライン大学の学生が学習方法を振り返ることで自己調整学習スキルが向上するという明確な成果としてまとめられている。また、自己調整学習スキル向上の支援方法として、学習方法を振り返る「メタ課題」の有効性と課題の提示の仕方についての改善点が示されている。これらの知見は、自己調整学習、成人学習の先行研究と照らし合わせても、新たな示唆として妥当なものであると判断できる。

3.4　本論文の独創性・新規性：本論文は、以下の点において独創的である。

3.4.1　2000 年代に入ってから日本においてもオンライン大学が開校し、多くの社会人が学んでいる。学生の４～５割が中途退学していくという問題があるにも関わらず、学生の学習状況や学習スキルに着目した研究は不十分であった。これに対して、本研究では、学生の自己調整学習に着目した。自己調整学習方略の使用状況、学習につまずいたときの対処状況を明らかにし、自己調整学習スキル向上のための支援方法についての知見を提示した。これは従来にはない新たな視点であり、本研究の独創性として評価できる。

3.4.2　自己調整学習の有効性についてはすでに多くの知見が積み上げられている。しかしながら、自己調整学習の先行研究の多くは、対面授業で学ぶ児童・生徒や若年の大学生を対象としたものであった。これに対して、本研究は、オンラインの授業で学ぶ成人学習者の自己調整学習に関する調査・実践研究である。また、成人学習者としての特徴を考慮した自己調整学習スキルの向上のための支援方法

についての知見も示している。これらの点は、従来にはない新たな視点であり、本研究の新規性として評価できる。

3.5　本論文の学術的意義・社会的意義：本論文は以下の点において学術的・社会的意義がある。

3.5.1　本研究は、成人学習者あるいはその移行期にある学習者であるオンライン大学の学生の自己調整学習についての知見を提供しており、この点において学術的意義があると考えられる。

3.5.2　本研究は、オンライン大学における学生の自己調整学習スキルの向上に対して貢献できる具体的な知見を提供しており、この点において社会的意義があると考えられる。

3.6　本論文の人間科学に対する貢献：本論文は、以下の点において、人間科学に対する貢献がある。

3.6.1　生涯学習の成功は人間科学の重要なテーマの一つである。本研究では、仕事などの社会的役割と両立しながらオンライン大学で学ぶ学生の自己調整学習の状況について新たな知見を提示しており、人間科学に対する貢献が高いと考えられる。

3.6.2　本研究では、成人学習者の特徴を考慮した自己調整学習スキル向上の支援方法についての新たな知見が示されている。人間を軸とした実践的な研究という点で、人間科学に対する貢献が高いと考えられる。

4　本論文の内容（一部を含む）が掲載された主な学術論文・業績は、以下のとおりである。

石川奈保子，向後千春　：　2017　大学通信教育課程の社会人学生における自己調整学習方略間 の影響関係の分析．日本教育工学会論文誌，40巻4号，315-324頁．

石川奈保子，向後千春　：　2018　オンライン大学で学ぶ学生の自己調整学習方略およびつまずき対処方略．日本教育工学会論文誌，41巻4号，329-343頁．

5　結論

以上に鑑みて、申請者は、博士（人間科学）の学位を授与するに十分値するものと認める。

以　上